

根戸小学校「地域交流室」が加わる

四月から新しく例会会場に

市民会館視聴覚室の閉鎖に伴い、本年から例会会場として我孫子市「久寺家近隣センター」を使用していますが、ご承知のとおり会場としては申込みのもの、使用の二ヶ月前に都度センターに出向いて申込みをし、抽せんを当たらねば使用が確定しないという煩瑣さがあります。

この程、市教育委員会より視聴覚室の代替会場として根戸小学校の教室を利用した「地域交流室」が指定され、先般視聴覚室の機材を移転させていましたが、この四月から正式に使用を認められ、例会会場に加わることになりました。

「地域交流室」の利用は、一年単位で認められるため、都度申込みといった煩瑣な面はなくなりませんが、普通の教室であるため、「近隣センター」と比べると、設備面で不満が残るの否めません。

今後、この二つの会場をどのように使い分けるかが課題であると言えます。

HP充実化分科会が動き出す

予ねてよりA A F Cの積極的PRのため、HPの充実化が課題でしたが、この程石田、堀端、上野、佐藤(久)、倉田の各氏に加え理事会メンバーの一部が参加する「HP充実化分科会」が発足、充実化に向かっていよいよ動き出しました。

HPの活用は、今や団体のみならず、個人的にも一般的になってきている状況から、A A F CのPRのため、如何に魅力的なHPを作るかが課題となっていました。

従来のページ上でも既に「掲示板」「会報」等の新しい項目が加わっていますが、充実化分科会の本格的な動きにより、このような内容の拡充と併せて、新しいHP上の、すばらしい「顔」ができるのも間近のもの、大いに期待されます。

それにつけても、問題は会員の皆さん一人一人の参画意識で、今一度このクラブを育成するために、ご自分もHPを活用する一方、何か一つでも二つでも自分でできること、寄稿できることなどを、是非とも加えて頂くことが強く期待されます。

また、近タイイベントの効果的な実施を図るため、「イベント企画分科会」(仮称)も発足される予定です。

オーディオと私

前号から始めた会員紹介のこの欄を、「オーディオと私」と命名し、第二回として吉川眞司さんに投稿頂きました。(編集室)

オーディオとの出会い

戦後のハイファイ時代を迎える幼児期から成長過程において、生活環境の中に開発、生産する音響メーカー(昭22)「電音・ラジオ・TVアンテナ・SP等の製造」「ラジオ技術に一時期毎号掲載された」の存在があった。周辺には物珍らしいパーツが山積みになり、ラポで音響装置に触れ、音を聴く機会に恵まれた。

十五、六歳のころからアンテナづくりの楽しみを覚え秋葉原に頻りに足を運びることになったのもこのころである。当時、メイン通りの一本裏手にY-Y音響の試聴室があった。ここでホーンの音に魅せられた体験が、将来の音づくりの原点と思われる。

二十代半ばはフォーウエイのY-Lホーンシステムを手に入して暫く聴いていたが、JBLがマニアの垂涎の的になるころには、友人が自負していた音に疑問を投げかけるようになったその原因がどこに潜んでいるのか、まったく究明を果たせないうままであった。

このころは同時平行的に山行きに情熱が注がれ、日本の有数の岩場や雪山などに毎年数十回通った。

仕事も中堅の領域に差し掛かるを疎かにできずオーディオや山行きなどの総てを封印し、仕事に傾注しなければならぬ日々が長い間続いた。……

オーディオは一日に一つならず

仕事の罫線から多少の余裕が出てくるころになると、オーディオ事情は一変し、デジタル化の進行とともにハイエンド・オーディオからはカミノリのごとき研ぎ澄まされたピュアな音がでていた。緊張感のある素晴らしい音の誘惑は経済的にも油断のならぬ代物となり、最早うつつの夢と化した。

そして現在のホーンの音をいま一度蘇えさせ方途はないのか。そのうえ、最新のオーディオでは得られないマイルドで癒える音は得られないものか。試行錯誤の日々を過ごすうちに、ある構想を描いた。ホンドドライバーをパーメンター仕様に変更、アンプは真空管増幅とし、フオノ入力のない極力妥協を排除し

たコントロールアンプ、メインはOPTが不要なOTLで構成する。そのうえ、適合したパーツによってネットワークの改造と電源強化のシフトを試みることであった。

プラン構築から十三年目が過ぎた今、幾多の段階を経て次第に音は高みへと近づいたことは間違いない。

一歩前進、一歩後退はいままでも幾度となくあったが、ますます道は険しく効果をもたらず確率が狭まった。クラブの方に試聴願ったところ、「この音のまま手を入れない方が無難では」との指摘を受けたが、独り善がりが高みへの望みを繋げるべく、湿濁とした状態に陥っている。しかし、よくよく考えるところのチャレンジには長期間を要したことで、一部のシステムの更新が目前に迫りつつあるようだ。



お好みの音楽

では、そんなに思い悩んできたシステムでどんな音楽を聴くのかと問われれば、特筆大書すべきものなど皆無である。

音楽に興味を抱くようになったのは、ラジオからエデンの東のテーマ曲が盛んに流れているところからで、中南米音楽のユパンキヤファル、スペインのセロリア、モンターヤなどのギター曲、パンチョスやディアマンテスらの甘い歌声、そしてディサルリ、プグリエーセ、

ダリエンソ、カナロ率いるプリンチョ等のタンゴを好んで聴いた。

その後はモダンジャズの世界にどっぷりと浸かることになった。新宿、渋谷、上野などのジャズ喫茶にはいずれも三十分程度で行くことができたため、地の利を生かして近所の友人達と頻りに通い、夜を明かして聴いた。当時の店には黒人米兵が入り居るなど一種独特の雰囲気を出しており、アルテックの大型ホーンスピーカーからは話し声が聞こえないほどの音量でブルースが流れ、私が引き込まれるのには十分過ぎるほどの条件が整っていた。

モンク、バーカー、ガレスピー、マイルス、クリフォード、バド、コルトレーンなど枚挙に遑が無いプレイヤーたちに酔いしれた。このころの私はジャズの根底には黒人の苦悩や絶望感から形成される魂があり、白人の演奏家などのジャズはもっての外と頑なに考えていた。今では年齢を重ねたせいかわ容と成って、そうした考えはどこかに置き去りにしてきたようだ。

クラシックはベームが初来日したころからと記憶している。フルベンの「第9」やワルターのモーツァルト、ベームの「英雄」やブラームス、シヨルティのマーラーやワグナー、ノイマンのドヴォルザークなどがあるが、オーケストラよりむしろ室内楽的な音が好きで、ヴァイオリン、チェロ、ピアノ、オーボエなどの三から八重奏の小編成ものが聴きやすく、オーディオの音のチェックにも一役買っている。

洞察力の甘さからか、特定のマスターピッチに深く入り込むことはない。これからは、音質を重視した最近の指揮者や演奏家のソフトを集めていきたいと考えている。

クラブの一員として

入会して様々な人との出会いを通して、新しいジャンルの音楽に出会うことができ、大変感謝している。月二回の会合を楽しみにしているものの、参加できないことも間々あり残念至極である。

会員同士のさらなる融和を深めることはもとより、年齢層の若年化を図り、会運営を活性化させることが今後の課題と思われる。

吉川眞司